

西南学院大学博物館設置の意義

高倉 洋彰

I

西南学院大学博物館は、学院創設期の歴史的遺産であります。W. M. ヴォーリズが設計しました3階建て赤レンガ造りの西南学院旧本館・講堂を甦らせて2006年5月13日に開館しました。旧1号館に設置されていたキリスト教展示室の所蔵資料を骨格に、アジアの西端で誕生したキリスト教がヨーロッパで成長し、やがてアジアに伝わって日本に定着するまでの受容の過程と苦難の歴史、キリスト教の普及に果たした西南学院の役割を、展示資料を駆使して視覚的に訴える使命を本館は帯びています。そしてそれが本館のテーマとなっています。

同時に、西南学院の歩んだほぼ90年の星霜を見守り続けてきた旧本館・講堂をただ保守するのではなく、大学博物館としての新しい生命を与えて活用することも、本館のもっている重要な使命なのです。90年近い歴史のもつ深い味わいは、ここで学んだ数多い生徒さんの昇り降りが巧みな自然の造形として作り出した階段の凹みのように、一朝一夕に作れるものではありません。その歴史の重みと本物の美しさが問わず語りに来館者を感動させてくれています。それは決して手前味噌ではありません。休息用の廊下の椅子に感想ノートを置いて、来館者の思いを自由に書いていただいています。

「1年半ほど在学しているのに、このような建物が同じ大学内にある事を知らず、初めて足を踏み入れた時はとても感動しました。」

「是非この重要な素晴らしい建物をそのまま残してください。」

「初めておとずれましたがまず階段に感激、2階、3階と見るにつれて白と黒のコントラストが美しい内部空間に魅了されました。静ひつに心あらわれるような気がしました。ぜひこの建物そのものを末永く大切に、たくさんの方がゆっくりとおとずれることができ



昔のままの長椅子。木のぬくもりが懐かしさとなって伝わる。

る場所でありつづけて欲しいと心から願います。」

「素晴らしい景観だと思いました。この雰囲気や空間をずっとこのままにしてください。」

といった感想が綴られていまして、この建物のもつ魅力を再認識させられています。中高や大学など、本学で青春を過ごされた卒業生にとっては昔を懐古するよすがとなっていて、

「1956年卒。50年ぶりにたずねて、昔をしのびました。また来ます。」

「卒業してから初めて来てみました。講堂に入るとありし日の自分の記憶がしみじみと……。母校ってのはいいものです。」

「うん10年振りの講堂でした。昔のままのオイルの臭いがなつかしか！～」
などと、読んでいます私までもが感動いたします。在学生・教職員・卒業生、そして多くの方々に愛される博物館であることを何にもましてうれしく思っています。

II

西南学院大学博物館は歴史系博物館に分類されます。日本の博物館の約6割が歴史系博物館ですから数は多いのですが、九州国立博物館のような大規模なものは例外で一般に規模が小さく、本館も例にもれません。入館者数も少なく、1館当りの平均入館者数は25,252人（2001年文部科学省調査資料）に過ぎません。同じ人文系博物館である美術館の48,861人に比べると、歴史系博物館の入館者数の少なさが理解できます。しかも平均入館者数は大規模博物館の数値で底上げされていますので中央値（同じような数をもっとも集中する値）で見ますと、中央値は平均値の3割程度になりますから、1万人を下回っていると思われる。大学が設置している博物館への入館者数を調べたデータはありませんが、地域から一種隔離された大学内部に設置されているから、さらに少なくなっていると推測されます。

本館は、開館9ヵ月後の2007年2月13日に、1万人目の入館者を迎えました。話題の九州国立博物館のように開館半年で140万人を超えるというようなわけにはいきませんが、設置前に予測した以上に健闘していると喜んでます。少なくとも歴史系博物館の入館者数の中央値を上回るのは確実です。その健闘を支えていますのは、赤レンガ館・キリスト教・西南学院をキーワードとするテーマが明確であるということにつきると考えています。昨年末に新人物往来社から『日本全国おもしろユニーク博物館・記念館』という博物館紹介の本が刊行されました。全国で59館が紹介されていますが、福岡県からは西南学院大学博物館（ドージャー記念館）が九州国立博物館と

ともに紹介されています。ちなみに大学博物館はほかに東京農業大学「食と農」の博物館と早稲田大学坪内博士記念演劇博物館が収録されています。東京農業大学と早稲田大学の場合は館名から内容が推測可能で、「今、食育を考える」「演劇に関することなら何でも」とそれぞれの特徴が簡潔にまとめられています。これに対して西南学院大学博物館（ドージャー記念館）は名称からは性格がわかりかねますが、「赤レンガの洋館でキリスト教世界と出会う」と要領よくまとめられています。外部の方が見ても、建物とテーマが明確なのです。

皆さんに愛される建物と明確なテーマをもつ西南学院大学博物館は、今後、大学博物館の重要なモデルとなっていくと考えています。



ギャラリー廻りの手すり

III

さて、博物館のノートに記されました見学の感想、本館のもつユニークさを書きましたが、ここに本博物館設置の目的と意義が適確に記されています。つまり本博物館設置の目的と意義は、声を大にして叫ばなくても、よく理解していただけています。そしてもう一つ、本博物館のもつ重要な意義があります。それは博物館が図書館とともに大学の知性を象徴するということです。

日本の大学には大学設置基準第36・38条で図書館の設置が義務付けられていますが、博物館を設置する必要はありません。そのため1986年段階では44の大学・短期大学に56の博物館施設が設けられているに過ぎませんでした。これまでの研究成果やあらゆる情報、智慧と知識を満載した図書を完備した図書館が大学教育に不可欠であることは大学設置基準に明記されているように当然のことです。しかしながら北京の故宮やパリのヴェルサイユ宮殿のことを本で読んで熟知し、写真やビデオで繰り返し見ても、実際にその場に立ったときの感動にはかないません。「百聞は一見にしかず」のことわざにもありますように、実際に一度でも実物を自分の目で見て獲得した知識は容易に理解できますとともに、簡単には忘れないからです。こうして、近年では大学教育に博物館が必要であるそのことが次第に認識されてきています。

博物館を必要とするように変化してきた認識を背景に、学術審議会が1995年に提言



竣工当時の本館（1921年）

しました「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」という報告を受けて、文部科学省は旧帝国大学系の国立大学に大学博物館を設置する方針を示しました。これ以降、博物館を設置する大学が増加するようになり、2005年5月段階で159大学・短期大学に200の博物館施設が設置されています（九州産業大学美術館緒方泉氏調査）。先の1986年段階に比べますと、20年間で4倍に達しています。しかしながら2005年度には726大学、480短期大学、計1206校が開設されていますから、博物館設置校はまだわずかに13.2%に過ぎないのが現状なのです。

西南学院大学への博物館設置はその必要性からすれば遅きに失した感がありますが、しかし大学の全体からすれば、決して遅いものではありません。そして本博物館の開館によりまして、西南学院大学の知性を象徴する図書館と博物館が完備されたこととなります。このことも博物館設置の重要な意義といえるでしょう。

最後にふたたび感想ノートから。

「こんな博物館のある大学に在籍していることを誇りに思います。」